―― ポーランドだより ――

変わりゆくポーラン

ポズナン市在住の（当協会特派員？）から届
ポーランドでの クリスマスの重要性が感じ

私はこの 2 年間、ポーランドの西部の町、ポズナン市に住んでいる者だが、かつて北海道大学で学んでいたことから、札幌とも縁が深い。

また、東京外国大学のポーランド学科にいた時には、ポーランド政府の奨学金をもらい、1998 年から 2000 年にかけてクラクフ市に留学することができた。現在、ポズナン市のアダム・ミツキェヴィチ大学と外国語大学で教えていながら、ポーランド人がいかに日本を見ているか、そしてポーランドがどのように変わったかを興味深く眺めている。そこで、変わりゆくポーランドの現在について報告を勧められた切っ掛けもあり、喜んで筆を執ったものである。

1.「実験」

今年のクリスマス・イヴの日の午後、スーパーで買い物をした。レジで私の前に並んでいた婦人は、大きくて厚手の透明なビニール袋に、生きたままの鯉を入れて持っていた。袋にはバーコードが付いていて、鯉の代金を難なく清算すると、恐らくは我が家へとその婦人は帰っていった。

ポーランドの伝統的なクリスマス休暇は、クリスマスの数日前から始まる。会社も学校も早々にクリスマス休暇に入り、人々は、年に一度の大切な行事に向けて、お金と時間を惜しまずに、それこそ気合を入れて準備する。――ツリーのための唐檜や樅の木を買ってきて、飾り付けをする。イヴの晩餐用の鯉を生きたまま買ってきて、食べるまでのあいだ浴槽などで生かしておく。もちろん、プレゼントを買うのも忘れてはいけない。それから、家中の大掃除をする。イヴの晩餐も含めて、クリスマスの祝日期間中になるべく料理をしなくて済むように、前もってご馳走を作ったり、ケーキを焼いたりする。こうして町全体がどことなく慌ただしく、昂揚感と陽気さの入り混じった独特の雰囲気に包まれる。これは、昔も今も変わらない。10 年以上も前に私が初めて経験したポーランドのクリスマスでも、今年のクリスマスでも、同じように繰り返されている風景である。

クリスマスの鯉料理

ただ、私が留学していた頃には、もうイヴの日からほとんどの商店が営業していなかったように思う。当時、ポーランドの伝統をまだ知らなかった私は、日本にいた時と同じ感覚でクリスマスを迎えようとして、大失敗をした。というのも、祝日期間中の食料を買い置きしておくのを忘れ、いざクリスマスを迎えてみると、町中が閑散と静まり返っているのだ。イヴから26 日までのあいだ、商店が完全に休みだったため、手許に食べる物がなくて、大いに困ったものである。

現在のポーランドでは、学校はともかく、会社がクリスマス休暇に入るのは年々遅くなっているようだ。そして、ほとんどの商店がイヴの日の夕方まで営業している。中には、「クリスマス・プレゼント 119 番」といった広告を大々的に掲げて、駆け込み需要を狙い、イヴの遅い時間まで営業しているデパートもある。イヴの日には、日中の食事の量を減らすという断食の伝統があり、晩餐までは満腹となる食事を摂らない。このような断食が義務づけられているのは、現在のカトリック教会では、年に 2 日、すなわち灰の水曜日と聖金曜日だけで、イヴの日については特に定められているわけではない。しかし、クリスマス・イヴがポーランド人にとって、灰の水曜日や聖金曜日に準じて特別な日であることを表す伝統として、カトリック教会も勧めているようだ。今日、この伝統がどれだけ守られているかは分からないが、日が暮れ、一番星が輝き出す頃になって、ようやくイヴの晩餐が始まる。日中の空腹を抱えての、待ちに待った晩餐である。

イヴの晩餐では（もちろん晩餐だけでなく、イヴの日のすべての食事で）、伝統的に肉を食べない。これも、現在のカトリック教会では、特に義務付けられているわけではなく、毎週金曜日の小斎と同じような食事をすることで、この日がいかに特別であるかを示している。そして、肉の代わりに鯉の料理を食べるのが、ポーランドのイヴ晩餐の習慣になっている。そこで、今でもクリスマスが近づくと、町のあちこちのスーパーで鯉が売られる。店内に特設の生け簀が作られ、客は生きたままの鯉を買っていく。

ただし最近では、若い夫婦を中心に、新しいクリスマス料理を試している家庭も多い。肉を食べないという伝統は守りつつ、しかし鯉ではなく、例えば海老や貝を使った料理を作って、いつもとは一味違った雰囲気を楽しんでいるようだ。イヴの数日前から郵便受けに投げ入れられる多くのスーパーのチラシにも、鯉と並んで、昔では考えられないほどの豊富な種類の魚貝類が、派手な写真付きで安売りされている。

クリスマスイヴのポーランドの食卓

ドのクリスマス休暇

いたホットな情報！新しい形で広がる伝統に、られるお話でした。　　津田　晃岐

二人で過ごし、晩餐の料理は「実験をしてみた」と誇らしげに語っていた。中には、寿司を作って食べたという日本通のポーランド人もいる。

晩餐の席では、家族全員が聖餅（opłatek）を分かち合い、互いに相手の聖餅を割り取りながら、相手のために願い事をし、互いに食べ合う。そして、皆で晩餐を食べる。伝統的には、12 種類の料理が食卓に並べられる。イヴの晩餐が終わり、お腹もすっかり落ち着くと、夜中の 0 時を待って、クリスマスの深夜ミサへと出かける。そして、その後は家へ帰って、温かいベッドにもぐり込み、翌日、クリスマスからは、七面鳥などの肉料理も含めて、ご馳走を食べまくる。

クリスマス休暇のうち、少なくともイヴから 26 日までの祝日期間は、家族と一緒に過ごすのがポーランドの伝統である。時には夫婦と子供だけでなく、祖父母、兄弟姉妹、叔父叔母、従兄弟姉妹も一つの家に集まり、大勢で賑やかに過ごす。しかし、「実験」をした友人夫婦に限らず、特に若い世代では、祝日期間中に両親や親戚の家を訪ねることはあっても、挨拶がてら顔を見せる程度で、イヴとクリスマスは同居する家族とだけ、のんびり祝う場合が増えている。私の教えている学生も、彼らのおよそ半数は両親とだけ今年のクリスマスを過ごしたと言う。大所帯での賑やかなクリスマスは、こうして少しずつ減ってきているようだ。

クリスマスが終わると、今度は年越しのパーティを盛大に祝う。学生の多くは下宿先へ戻り、友達と一緒に夜通しで大騒ぎをする。これも昔と変わらない風景だが、今では、実に様々な種類の花火が店々で売られている。そして、年越しの瞬間には、町の至る所で色鮮やかな花火が打ち上げられ、我が家のバルコニーからも綺麗に見物することができた。

2. 新しい伝統

ところで、私の住んでいるポズナン市には、クリスマス・イヴにまつわるちょっと面白い伝統がある。

この町出身の女流作家マウゴジャタ・ムシェロヴィチの作品に、「ノエルカ」という小説がある。ポズナンの町を舞台にして、1991 年のクリスマス・イヴの一日に 17 歳の少女エルカの周囲に起こった出来事を、温かみとユーモアのある言葉でつづった作品である。

祖父メトディと大叔父ツィリルはエルカから、町の中心にあるロータリー交差点の地下通路で、自分の描いた絵を売っている老婦人に会ったことを聞く。このロータリー交差点は「ロンド・カポニェラ」と言い（小説の中では「コペルニクス・ロンド」と呼ばれている）、ポズナン市の中心部にあり、その地下は通路になっているだけでなく、キオスクなどの様々な商店が並び、時には露天商が店を出していることもある。イヴの過ごし方をめぐってエルカが癇癪を起し、家を飛び出していった後、メトディとツィリルは、自宅に用意していたイヴの晩餐の料理を、エルカの父グジェゴシュと一緒に、「ロンド」の老婦人の許に運んでくる。そして、年老いた兄弟は、若き日の憧れの女性テルペントゥラと再会する。

「マウゴジャタ・ムシェロヴィチ」

「ちと待った！」とメトディは命令するように言った。財布を取り出し、その中から折り畳んだ紙を取り出した。紙の中には 2 枚の四角い聖餅が入っていて、それもすぐさまメトディはテルペントゥラと、そして自分の兄弟と割り合った。グジェゴシュには、当然、一番最後に近づいた。

ロンド・カポニェラ

二人は聖餅を割り合い、しっかり両方の頬にキスをし合った。が、その後は、相手のための願い事をする言葉がさっぱり出て来なかった。毎年のことである。さいわい、ちょうどテルペントゥラが嬉しい願い事をしながら近づいてきた。そこで、グジェゴシュは彼女の手にキスをすると、彼女も彼の額にチュッとした。ツィリルは、どういうわけかとても感動していて、どうしていいのか分からず、聖餅を持ったまま彼らの周りを二度回った。それから突然、聖餅をテルペントゥラの隣で商っていた小奇麗なヴェトナム人達と分かち合い出した。彼らはとても驚いて、嬉しさまじりもびっくりしながら、彼の仕種を受け入れたので、可哀そうな伯父は、この古代ポーランドから今日に至るまでのイヴの伝統について長々とした説明をする気になった。

（マウゴジャタ・ムシェロヴィチ「ノエルカ」津田晃岐訳）

こうして、入念に準備された団欒の家庭ではなく、寒々とした「ロンド」の地下通路に、ポーランドのイヴの伝統が突如として現れ、周囲にいた見知らぬ露天

ロンドの地下通路

商たちをも巻き込んで、ごく自然に広がっていく。

この小説が発表されたのは1992年だが、以来、ポズナンでは毎年クリスマス・イヴの夜、ムシェロヴィチのファンを中心に、市民が「ロンド・カポニェラ」の地下通路に集まり、一緒にクリスマス・キャロル（kolęda）を歌い、互いに聖餅を分かち合う。相手の聖餅を割りながら、その人のために願い事をし、割り取った分を互いに食べ合っていく。見知らぬ者同士がクリスマス・イヴの一時を共有し、聖餅とともに願い事をも分かち合うという、文字通り寒い中にもとても心温まる伝統である。今後も続いてほしいものである。

3. 新しい休日

こうしてポーランドでは、年越しのパーティの後、正月の三箇日を待つことなく、早々に日常へと戻る。会社が再開し、学校も始まる。少なくとも、それがこれまでの伝統だった。ところが、今年は少し事情が違った。

クリスマス休暇が明けて間もない1月6日――この日が今年 2011 年から、国家の休日となったのだ。1月 6 日というのは、「公現祭」あるいは「顕現節」、「主顕節」とも呼ばれるカトリック教会の祭日で（国によっては、必ずしも1月 6 日に祝わない場合もある。例えば日本のカトリック教会では、1月 2 日から8日までの間の日曜日に祝うことになっている）、東方の三博士による幼子イエスへの訪問と礼拝を記念する日である。

この祭日は、1960 年まで国家の休日として祝われていたものだが、当時の共産主義政府によって廃止

「三博士の祝日」に関し、憲法裁判所に請願を提出したことを伝える「レヴィアタン」のホームページ。

2 てしまった。もちろん、休日でなくなった後も、祭日自体はずっと教会で祝われてきた。1989 年の民主化から、ポーランドのカトリック司教協議会は毎年、この祭日を国家の休日に戻すように働きかけてきたのだが、様々な理由により、これまでは実現しなかった。ところが今年（正確には、去年 2010 年 9 月の国会で）、この1月 6 日を「三博士の祝日」として国家の休日にする法律が可決され、その後、大統領が公式に署名したことから、突如、新たな休日が出現したのである。まさに青天の霹靂の出来事だった。国民は新しい休日をおおむね歓迎しつつも、「どうして今になって突然可決されたのか？」、「なぜ 9 月に決まったものを 1 月から性急に導入するのか？」という驚きや疑問も拭えない。中には、露骨に戸惑いや動揺を表している者もいる。現に、この新たな休日の突然の出現は、至る所で影響を及ぼしており、少なからぬ混乱を引き起こしている。

例えば、私が教えているアダム・ミツキェヴィチ大学は国立大学なので、国家の休日を遵守しなければならないのは、当然である。しかし、法律が可決され、その発効が決まった時には、すでに新年度の時間割が定められた後、しかもそれを発表してしまった後だった。そこで、学期の半ばになって急遽、一学期の最終火曜日に木曜日の授業を行うべしという学長の決定が出された。というのも、今年の場合 1 月 6 日が木曜日で、授業が予期せず休講となってしまったからで、火曜日が終日「木曜日」となってしまったのだ。これには、先の独立記念日（11 月 11 日）が同じく木曜日で、やはり国家の休日であったために授業ができなかったことも関係しているかもしれない。

そして、混乱はまだ続いている。この1月 19 日に、ポーランド民間企業家連盟「レヴィアタン」が法律の違憲性の審理を求めて、ポーランド憲法裁判所に提訴したのである。連盟によると、この法律は、「公的権力機関は法令に基づいて、法令の範囲内で活動する」こと、そして「ポーランド共和国は批准した国際条約を遵守する」ことを定めた憲法に違反していると言う。ここで問題になっているのは、バチカンとポーランドの間で結ばれた政教条約で、そこには 1 月 6 日が休日として含まれていない。また、今回の法律はバチカンとの「合意」なしに制定されたらしい。さらに、クリスマスと年越しパーティには出費を惜しまず、盛大に祝う伝統があるポーランド人にとって、クリスマス休暇直後の1月 6 日が休日となったところで、財布の紐はすでに固く、経済効果はあまり期待できない。そのうえ、企業が休業することでポーランドの国際競争力が低下し、投資家にとってもポーランド市場の魅力が削がれることになると連盟は強調している。

審理はまだ始まっていない。裁判の行方は今後見守っていきたいが、ポーランドの変化をまざまざと見せつけられた一幕であった。

つだ・てるみち（ポズナン外国語大学講師）

【編集部より】
津田さんのエッセイで紹介されているマウゴジャタ・ムシェロヴィチ著『ノエルカ』は田村和子さんの翻訳で未知谷から出版されています。素晴らしい小説ですので、ご興味をもたれた方はぜひお読みください。

「ノエルカ」日本語版